

フロール通信

2024年1月10日

理想とされる不妊治療施設とは―第29回臨床エンブリオロジスト学会参加報告―

1月9日赤坂に於いて第29回臨床エンブリオロジスト学会が開催され、当院胚培養士の小林と一緒に参加してきました。そのなかで、生殖医療の施設基準や、理想とされる不妊治療施設に関する講演がありましたので、報告いたします。

2022年に体外受精（ART）が保険適用されるにあたり、治療の指針となるガイドラインの作成に携わった医師の講演がありました。胚培養士は医師、看護師と共にARTを行う上で不可欠な職種であり、顕微授精、胚凍結・融解などの必要不可欠な技術から、卵子活性化や胚生検などのIVF add-onsといわれるものまで、ラボ運用における新規技術をふまえ、年間150件以上の採卵を行う施設においては2名以上の配置が必要である、とガイドラインに記されていると述べておりました。当院は開院以来採卵数200～250件/年で推移、現在は日本卵子学会認定の生殖補助医療胚培養士2名で培養業務を行っています（ちなみに私（院長）も、卵子学会の胚培養士の資格を持っていますが、医師は人数には含まれません）。私も含め、胚培養士は皆さんに最良の医療を提供するため、院内抄読会・勉強会、学会参加等で最新の知識を習得し、日々技術の向上に努めております。

また、プロゴルファー東尾理子さんの「理想とする不妊治療施設とは」と題する講演がありました。東尾さんは、TGPという妊活の会社を設立し活動をされておられます。講演では、1）待ち時間、2）医師の対応、3）治療成績の公開、4）自費料金の掲示、等を不妊治療施設の選択基準として挙げていました。1）、2）は当院でも皆さんにしばしば指摘されることであり、常に改善しなくては、と思っております。3）に関しては、不十分な点もあったと考えており、取り急ぎ年齢別の凍結胚移植の妊娠率を掲載します。また、4）の自費料金は2023年3月に、40歳以上で保険が終了し自費となった方がおり、それに合わせたタイミングで料金の改定を行いました（以前の料金より3割程度値下げをしました）。いずれもHPのおしらせに掲示しましたので目を通していただければ幸いです。

今後とも、皆様に安心して治療を受けていただけるよう努めてまいります。宜しく願いいたします。